

図書館通信 —83—

1988. 3

大学図書館に未来は？

附属図書館長 森口治生

陽春、静岡大学にとっては40回目の、大谷の附属図書館にとっては20回目の新入学生を迎えた。老館長は還暦を迎える。

この間、歴史的には短い時間であったとしても、生徒・学生そして教師として、どちらかと言えば閉じた社会である学校の中から眺めて来ただけでも、かなり変動の激しい時期を幾つか通りすぎて来た。

多くの産業、職業が衰え、あるいは姿を消し、新しい企業、職業があらわれ、成長をとげた。衰えた中には、かつては国の基とまで言われた農林水産業、基幹産業と言われた炭鉱、輸出立国の花形であった紡績、造船等がある。それぞれが大きな痛みを残しつつ小さくなって行った。

今の新入学生の世代が創るであろう20年、40年後の日本、世界はどうなって行くのだろうか。

さて、このような変動の中で、日本の大学は、受験産業やリクルート産業の急成長ぶりには遠く及ばないとしても、量の上では紛れもない高度成長をとげた。よく言われるように大学には3つの役割がある。一つは質のよい労働力を社会に提供する、つまり学士を生産することで、俗に教育と言われる。もう一つは論文を発表する、つまり学識を生産することで、俗に研究と言われる。残る一つは働く必要のない若者にレジャーの場を与えることで、これは表向きは大学の目的になっていないが、実際には重要な役割のように見える。

大学が成長を続けたのは、これらの役割の中で、どれが買われたのかよく判らないが、大学図書館もまたこれらの役割のすべてに多少ともかかわりをもって存続して来た。

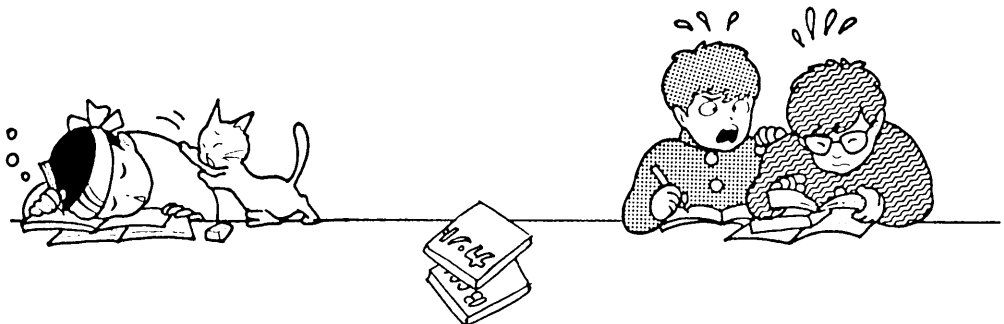
が、これからはどうなるのだろうか。

当然ながら、図書館の一員としては、斜陽化の道を辿りたくはない。だが、斜陽産業の多くがそうであったように、企業内努力だけでは、この変動の激しい社会には適応しきれない。たえず外から活力を取り入れて行かなければいけない。新しいアイデアを産み出して行かなければならない。

大学の教職員はサラリーマンの常として、しばしば余りにも保守的である。しかし、大学は学生と言う若い活力をもった——又はもち得る——貴重な財産を持っている。

未来ある図書館のために、学生諸君の若さを借りたい。

そのためには、皆さんまず図書館に来て下さい。たとえ単なるひまつぶしが目的だとしても。



ピーピーピー!?

今野喜和人

図書館の本を不正に持ち出そうとすると警報音が鳴る装置を初めて見たのはかれこれ十年近く前のことだろうか。パリに留学中、書庫内の本が出て来るまで一時間はゆうに待たされる国立図書館(B.N.)を嫌って、開架方式で、新しい本についてはまず申し分なく揃っている近代的なポンピドゥーセンターに通っていた頃のことだ。内部にコピー機は有るが、印刷・紙質ともに粗悪で割高だったので、一寸だけ持ち出して(貸し出しは行っていなかった)、外の店でコピーし、すぐ返しておけばいいやなどというケシカラン事を、別に荷物チェックもない出口の様子を見てひそかに思っていた。ところがこの軽犯罪を実行に移す寸前に例の装置の存在を友人から聞き、罰金は有無を言わず千フラン(貧乏留学生にとってなんたる大金!)であることを知って冷や汗をかいたことがある。あやうく東洋の野蛮国の学生が西洋文明のワナにからめとられるところだったのである。

その後この文明の利器は日本にまで渡来し、今では我らが学び舎の図書館にまで据え付けられている。どうも利用者をはなから疑ってかかる陰険な装置のようにも思えるが、開架方式を守り、かつ自分の荷物を自由に持ち込むためにはなくてはならぬ機械なのだろう。

とはいうものの、あの磁気だかなんだかが漂う狭い空間を通過するのはあまり愉快なものではない。やましいところは何もなくとも一種の身体検査を受けている気分は拭えない。つい自分の荷物の中に館内の本が紛れ込んでしまったような場合、あるいは何らかの超常現象で自分の身体から異様な磁気が発散されていたような場合、どんな言い訳をすれば良いのかなどと、心の底で悩みながら通り抜けているのは私だけだろうか。

「新入生への図書館利用の勧め」が私に与えられた題であったのに、話が変な方向にそれてしまった。新入生諸君、とにかくこの装置を毎日堂堂と、通り抜けて下さい。(どんな音がするのかわかめてみようなんて考えはおこさぬように。)

(人文学部・比較文学)

本との出会い

澤渡千枝

希望に胸をふくらませて入学してきたひと、ただ何となく大学生になってしまったひと、あきらめ気分で入学してきたひと、とにかく御入学おめでとう。人生や大学生活に疑問を感じたとき、何かで気持ちが滅入ってしまったとき、遊びに行きたくてもお金のないとき、授業が突然休講になり、時間をもてあましているとき、図書館は格好の“相談相手”=本を準備してあなたを待っています。とはいうものの最近の私は忙しくて、目録や文献速報などで検索した学術報告に目を通すだけの利用者になってしまいました。たしかにこれは、図書館の一般的な利用法のひとつですし、学生時代には、レポートの作成や試験勉強のための参考書を読むために図書館を利用することが多かったのですが、それ以外にも、図書館に並んでいる本の背中を目的もなく眺めて回り、何気なく手にとってページを繰ってみるひとときもあり、なかなか楽しいものでした。つついそのまま引込まれて読み進むこともあり。探すともなく搜していた、心の奥に震動の伝わるような本に出会ったときには不思議な興奮を覚えます。

そんなふうにして見つけた本の一冊に「ナイロンの発見」(井本稔著、東京化学同人)があります。この本は、ナイロンやクロロプレンゴムを発見した科学者カローザスの半生——18歳半のとき、大学進学をあきらめて家計を助けようと考えるところから始まり、やがて苦学しながらも大学を終え、助手、講師を経てデュポン社の研究員になり、めざましい成果をあげてもなく40歳で自殺するまで——を日記形式で綴ったものです。著者の井本稔博士は小説家ではなく高分子科学者ですから、残された資料に基づいて、科学者カローザスの心理を的確に推察し、また共感をもって書かれています。ここには、何かの専門を極めようとしている人達に共通するであろう悩みや、純粋さがあり、また、内容がやや専門的な箇所には、非常に平易な解説が加えられていますのでこの分野の勉強にもなります。新入生の皆さんにカローザスの様な一生を送ってほしくはないのですが、現在の私たちが失いかけているものをおもいださせてくれる名著です。

(教育学部・被服学)

良い本？

溜 瀧 継 博

毎年、1月になると『日本理学書総目録』が送られてきます。この『総目録』は現在書店で入手可能な理学関係の本(専門書)を網羅したもので、1988年版は約9800点の書目を掲載し、頁数約500、厚さは2cmにも達しています。今からほんの(?)10数年前、私が大学生だった頃の『総目録』は厚さが現在の半分にも満たなかったし、私の専門の物理学の分野に限れば、そこに掲載されている本の殆どは開いたことがあるか、そうでなくても図書館や書店で背表紙くらいは見たことのあるものだったと記憶しています。

大学を卒業してからは日本語で書かれた専門書を読む機会はめっきりと減っていたのであまり意識していなかったのですが、63年度に電磁気学を担当することとなり、何気なしに今年の『総目録』を開いてみると、何と、書名に「電磁気」とつくものだけを数えても70を軽く越え、関連したものを含めると90にも達することに気がきました。

時々、学生から「勉強をしたいので何か良い本を推薦して下さい」と頼まれます。しかし、具体的に訊いてみるとどうも目的がはっきりしない場合が多いので困ります。また、何かを調べるときに、似た題名の本を何冊も抱え込んで片端から目を通し、そのものズバリが載っていない為に結局縮めてしまう学生も目に付きます。人はそれぞれ個性をもっているのですから誰にとっても絶対的に良いなどという本があらう筈はありませんし、調べたいことがそのままの形で出ていることはむしろ稀です。自分にとっての良い本とは、興味ももて、自分の能力にあった、最後まで読み通せる本だと思います。良い本に巡り会うには努力が必要で、また、そのきっかけは人それぞれです。

図書館にはかなりの数の本が揃っています。まずは良い本を1冊だけ探し出して最後まで読み終えてみましょう。きっと、それまで全く別物と思っていたこととの関係が見えてきたりして、物事が非常によく分つてくると思います。このことは10冊の本を読みかじるよりも遙かに価値があります。

この情報過多な時代、いかにして多くの情報を得るかということよりも、いかにして必要な情報のみを得るかという点こそが重要なのだと思います。

(理学部・物理学)

読書家でない学生諸君へ

浅 井 秀 樹

私自身、学生時代に夢中になって読んだのはいわゆる推理小説の類であり、あまり文学的作品とは縁がなかった。それでは、私のような読書家でない理工系の人間にとって、大学の図書館とはどんな場所であるのか? 読書を楽しむというよりは、文献の検索或は、実験レポートの作成場所と言った方が正確であろう。

理工系の学生にとって、大学入学と同時に大きな負荷となるのが実験とそれに伴う報告書作成である。このための資料となるのが専門書と友人のレポートである。どちらの比重が大きくなるかには個人差があるが、私の場合は、一応前者であったと記憶している。私の通った大学では、図書館の一部が、一種、サロンの雰囲気であったため(今では、新しい図書館が建ったため、本当のカフェテリアになってしまった)、レポート提出前日ともなると、独特の賑やかさがあつた。

専門書を読むことは、教養部時代の学生にとっては、苦痛であることがほとんどだと思う。難解な記述と複雑な数式が相手では、1頁読むのに数時間或は数日を費すことが普通である。(これだけの時間を費せば、赤川次郎の推理小説なら軽く1~2冊は読めてしまうのに…)専門書を読む上で他の障害となるものに技術専門用語が挙げられる。これを明確化するために、論文の“孫引き”をよくすることになる。孫引きしたコピーの量が大量になってしまい、結局、give up という話はよく聞く話である。ただ、このような苦労は、それ程無駄ではないと思われる。

教養部時代は、“良き友”がいれば、図書館の利用なしでもやっていける。しかし、専門課程に移ると、必然的に図書館のお世話になることになる。その時迄に、自分なりの図書館利用法というものを考えておくことには意義がある。

読書嫌いは許されても、図書館嫌いではすまされなくなる。何故なら、諸君はもう大学生なのだから。

(工学部・光電機械工学)

図書室と私

澤田 均

ふり返るにはまだ早いですが、小学校の図書室、いやそれより以前に母親に兄ともども連れられ、長い道のりを歩いて通った北海道の小さな町役場の古びた図書室から、今までずっと図書室とつきあってきた。市場の片隅に野菜にまみれて置かれていた「ボーイズライフ」や「少年」の雑誌類も、小さい私には立派な図書室だった。あの頃は本も少なく、本というのは何かとつてもエライもののように、それさえ読んでいれば世の中のすべてがわかるように思えた。

中学校では図書係というものをしてきた。本の貸し出しとか整理などの単調な仕事ばかりで、今のように図書館に情報システムが発達するなど夢にも思わなかった。先日、新時代コンピュータを紹介するテレビ番組をみていたら、活字や図表だけを保存するのではなく、近い将来映像や音をも保存して簡単に利用できるようになるらしい。百科辞典ディスクの中の「トラ」という項目を選択したら、ディスプレイにトラの行動が映り、スピーカーから鳴き声が聞こえてきた。本のイメージも確実に変わってきている。

ところで、長いこと図書室とつきあっているから、当然ハプニング（もちろん輝かしいものも少しはある）や得意の失敗談の類も多い。敷居の高くなってしまった図書室もあるが、失敗談もだんだんつかしい思い出になってきた。もしかすると、教官を始めてからズウズウしくなってきたのかもしれない。

実はこんなことを書くのではなく、ズウズウしく新入生の方々にもっともらしいことを書かなくてはと思っていた。そこで、最後にドタバタともっともらしく付け足そう。「情報を与えられるだけに満足せず、自分で情報を収集・整理し、論理的な文章を書き、発表できる人になってほしい。情報のホンモノとニセモノを見分けられる人になってほしい。」情報量はどんどん増えている。気をつけないと溺れてしまう。現に私の研究室のボックスファイルは年々増え続け、文献を読むというよりは情報を収集・処理するという物理的作業に近くなっている。時代はそれでも若い人の確かな眼を要求している。とりあえず、図書館にいったいどんな本があるのか、知的好奇心をどこで満足できるのか、searchしてみようか。

(農学部・農学)

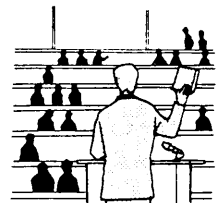
読書の心構え

溪村和明

ご入学おめでとうございます。すばらしい環境に恵まれた静岡大学で新入生諸君と一緒に勉学に勤しむことができることを誠にうれしく思います。諸君は、まず大学の図書館の大きさに驚かれるのではないのでしょうか。静大の図書館は、広大なキャンパスの中心に位置しております。船にたとえて言えば、図書館は大学の竜骨です。そのことを再認識しておいて下さい。蔵書の数も年々増え続け、どこにどんな本があるのかを楽に探し出すことができるようになるためには、常に図書館に足繁く通うことです。自分で調べても分からないことがあったり、本学の図書館にないような本、雑誌等をどのようにして手に入れればよいのかといったような問題が生じれば、臆することなくレファレンス・サービスを利用することが肝要かと思えます。図書館に赴く回数と知性の深さは比例してくるはずですが。但し、試験期間中、単位を得るためだけの図書館利用はあまり感心しません。

ところで、学生時代、図書館を散策している時、一部の不心得な読者によって共有の知的財産である書物に線が引かれていたり、時には破り取られたりしているのをよく見かけました。消しゴムで一所懸命消したりしたが、情けない気持ちがいままで残ったことを記憶しています。今でも、そうした見るも哀れな書物に出会うことがあります。本は著者の魂の結晶であり、そこには傷つけられると血が噴き出すほどに生命のかよった言葉が生き続けているのです。大切に取り扱ってほしいものです。最後に、「賢明な読書、すなわち澄んだ魂で真の書物を読むことは高尚な営みである」と言ったアメリカの思想家 H.D.ソローの言葉を座右の銘として頂きたく新入生諸君に送りたいと思います。生涯忘れることのできない人生の指針となるような「真の書物」に邂逅することができるよう心から祈ります。

(教養部・英語)



外国学術図書購入リスト

1. All U.S. Department of Agriculture Publications. [全国農務省全出版物]
(マイクロフィッシュ)
2. Social and Economic Development Plans. except for Africa. [世界各国の社会・経済開発計画・資料集 アフリカを除く]
(マイクロフィッシュ)
3. Chemical Abstracts
8th Collective Index
9th Collective Index
10th Collective Index
[ケミカル アブストラクト 第8-10回 累積索引]
4. Aetas Kantiana. 240 titles(335 vols.)
Reprint ed.[カント時代・哲学書複製シリーズ]
5. European Journal of Biochemistry, vol.1-161. [ヨーロッパ生化学雑誌]
6. United States Decennial Census Publications, 1790-1960. [米回国勢調査報告 第1回-第19回]
(マイクロフィルム)
7. Cell and Tissue Research, vol.186-246.(1978-1986) [細胞と組織研究]
(マイクロフィルム)
8. Journal of Biological Chemistry, vol.1-193. (1905-1951) [生物化学雑誌]
(マイクロフィルム)

図書館委員会報告

(昭和62年度第4回 S62.7.24・金)
議事

1. 館長、分館長の交替について
2. 第1回図書館業務電算化委員会について
3. 第34回国立大学図書館協議会総会について

(昭和62年度第5回 S62.9.3・木)
議事

1. 外国学術図書の購入について

(昭和62年度第6回 S63.1.18・月)
議事

1. 昭和62年度学生用図書購入費の第2次配分について
2. 昭和62年度外国雑誌購入費の配分について
3. 昭和63年度指定図書の実施方針について
4. 昭和63年度大型コレクションの収書計画について
5. 昭和64年度概算要求事項案(本館閲覧室の冷房)について
6. 第3回図書館業務電算化委員会について

新入生のための図書館利用案内のお知らせ

ライブラリー・オリエンテーション

- 期 間： 4月18日(月)～4月22日(金)
- 第1部： 図書館および資料の案内と利用法の説明(ビデオによる繰り返し放映)
- 時 間： 午前10:00～午後4:00(除く12:00～13:00)
- 所要時間： 1回20分
- 場 所： 喫煙コーナー(4階閲覧室入口右側)
- 第2部： 書庫内案内
- 時 間： 第1回 午後1:30～ 第2回 午後3:30～
- 所要時間： 毎回20～30分
- 集合場所： 喫煙コーナー(4階閲覧室入口右側)

教職員著作寄贈図書(本館)

- 安藤実 (人文学部)
『いま税制改革を考える』〈執筆〉青木書店
⇨ 345.1/U 92
- 近昭夫 (人文学部)
『チュプロフの統計理論』産業統計研究社
⇨ 418.8/C 66 k
- 間庭充幸 (人文学部)
『文化と犯罪』群众出版社⇨ T 369.12/Ma 44
『子供たちの復讐』上〈執筆〉朝日新聞社
⇨ B 370.4/H 84/1
- 坂本重雄 (人文学部)
『社会保障と人権』勁草書房⇨ 364.3/Sa 32
- 山崎眞秀 (人文学部)
『現代教育法の展開』〈編〉勁草書房
⇨ 373.2/Y 48
- 伊藤宏 (教育学部)
『陸上運動の方法』〈執筆〉道和書院
⇨ 782/Se 38
『ジョギングのすべて』〈執筆〉ランナーズ
⇨ 782.3/Sa 75
- 小和田哲男 (教育学部)
『伊達正宗』講談社⇨ 289.1/D 44 o
- 長澤敬之助 (理学部)
加藤芳朗 (農学部)
『粘土ハンドブック』第2版〈執筆〉
技報堂出版⇨ 458.7/N 77
- 新妻信明 (理学部)
『海洋地質学入門』〈共著〉シュプリンガー・フェ
アラーク東京⇨ 452.15/Se 17
- 土隆一 (理学部)
近田文弘 (理学部)
『日本の湖沼と溪谷』7〈執筆〉ぎょうせい
⇨ 291.09/N 77/7
- 中尾健二 (教養部)

- 『ハーバーマスと現代』〈執筆〉新評論
⇨ 361.24/H 11 f
- 田村貞雄 (教養部)
『ええじゃないか始まる』青木書店
⇨ 210.58/Ta 82
- 静岡大学方言研究会
『図説静岡県方言辞典』〈共編。望月誼三、中條
修、日野資純 [ほか] 執筆〉吉見書店
⇨ 818.54/Sh 94
- 杉山忠平 (名誉教授)
『明治啓蒙期の経済思想』法政大学出版局
⇨ 331.21/Su 49
- 植松茂 (名誉教授)
『離屋詠草』下〈共編〉鈴木朗学会
⇨ 911.58/Su 96/2
- 静岡大学附属静岡中学校
『「納得」をめざす追求過程』〈共著〉
明治図書出版⇨ 375.1/Sa 14
- 静岡大学教育学部附属浜松中学校
『自己学習能力を育てる』〈編〉編者
⇨ 375/Sh 94

お知らせ (本館)

◎春期休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊
貸出開始：昭和63年2月15日(月)から
返却期日：昭和63年4月18日(月)
なお、卒業見込者及び工学部3年進級見込者には長期貸出はいたしません。

◎春期休業中の開館状況

3月22日(火)～3月26日(土)
平日は午後5時、土曜日は正午で閉館

3月28日(月)～3月31日(木)
蔵書の点検(4・5階)のため、休館

4月1日(金)～4月9日(土)
平日は午後5時、土曜日は正午で閉館

図書館利用票



0123456789

人文学部

安部利己

静岡大学附属図書館

もう受取りましたか……

あなたの図書館利用票が、できています。図書館のカウ
ンターに学生証を提示してください。その場で、すぐに発
行します。